

アフリカ

1960年、アフリカが長い歴史を解放運動のものが独立を果したが、後述の年に「アフリカの年」と呼ばれることとなる。これは、突然に他の国々も、植民地からの完全な脱却と自立を目指し、植民地を振り返していき、その1966年、初めて隊員がアフリカの地ケニアに入った。以来、隊員たちは過酷な環境の中で模索しながら、国家の建設につながる協力活動を展開して現在に至っている。地域にこだわらず地球規模で取り組まれた「緑の推進協力プロジェクト」、厳しい自然の中で生命を尊ぶ医療プロジェクトなど、チーム派遣から、個別の教育文化、農林水産分野など幅広い隊員たちの活動がこの大地で光り輝いている。



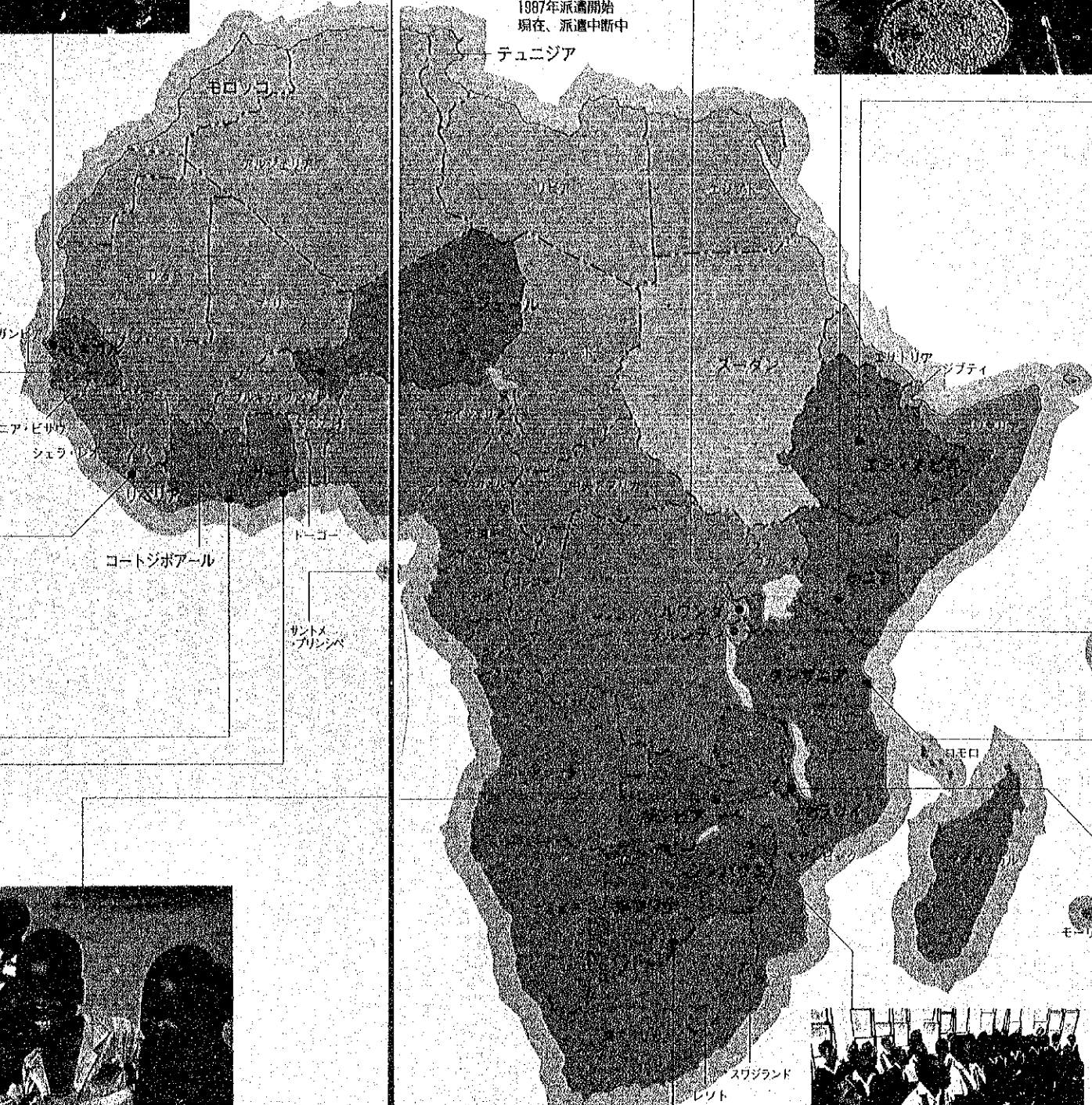
セネガル
1960年派遣開始



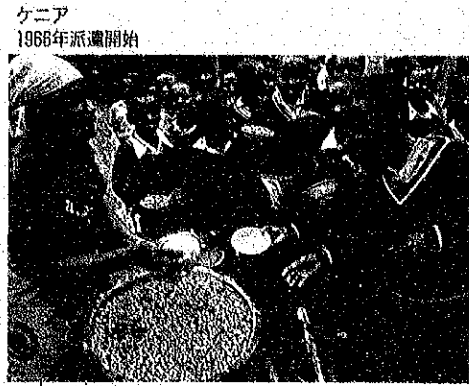
ニジェール
1984年派遣開始



リベリア
1970年派遣開始
現在、派遣中断中



ルワンダ
1987年派遣開始
現在、派遣中断中



ケニア
1966年派遣開始



エチオピア
1972年派遣開始



ブルンジ
1992年派遣開始
現在、派遣中断中



タンザニア
1967年派遣開始



コートジボアール
1991年派遣開始



ガーナ
1977年派遣開始



ザンビア
1970年派遣開始



ボツワナ
1992年派遣開始



ジンバブエ
1989年派遣開始



マラウイ
1971年派遣開始

タンザニア

幼い子供たちの、いのちを守りたい 「イロンガ母子福祉センター 拡充プロジェクト」は そんな祈りで始まった

1988年、初めて保健婦隊員がこの地に派遣されたのをきっかけに、1992年、新たなチーム派遣「イロンガ母子福祉センター拡充プロジェクト」がスタートした。

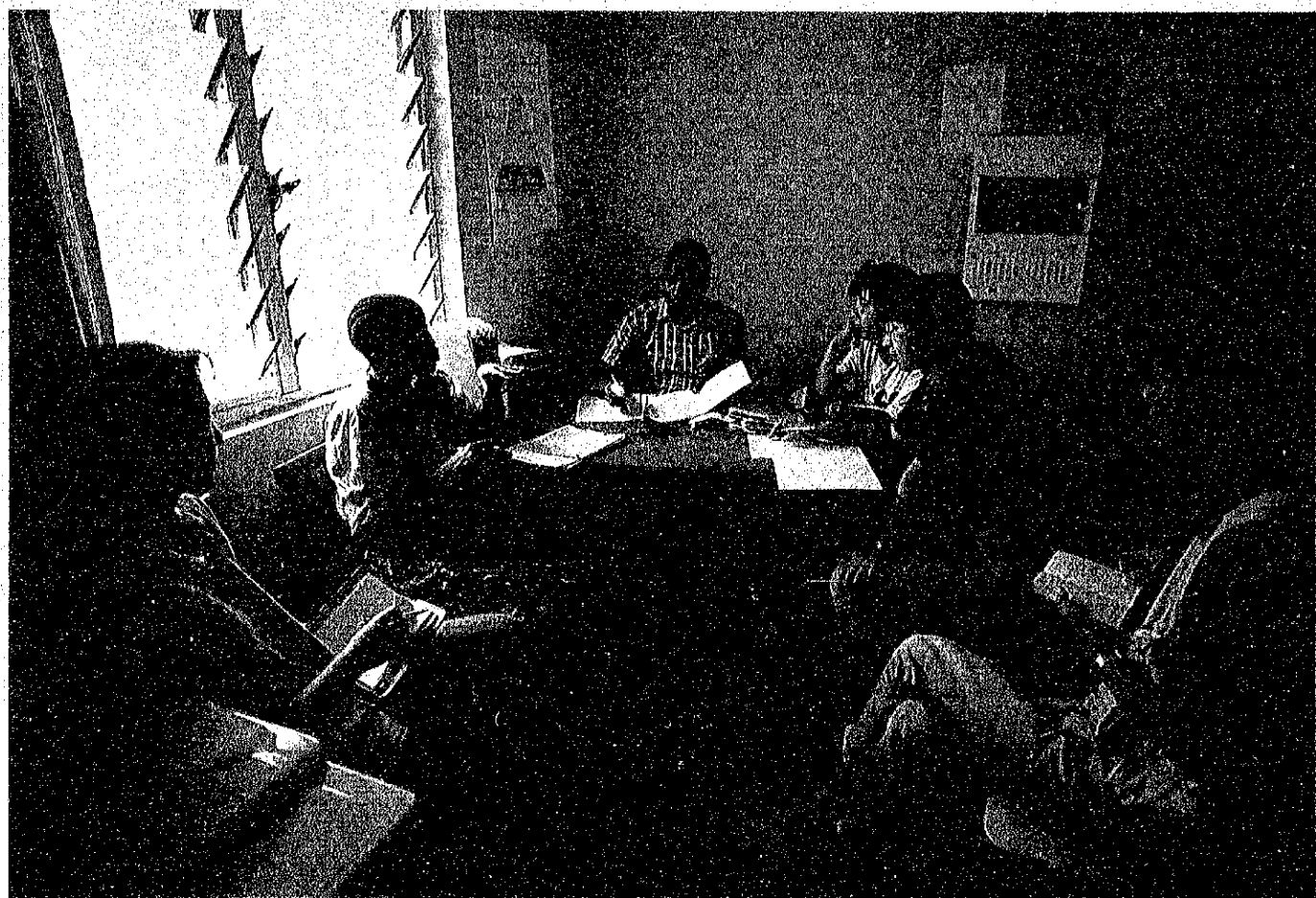
現在、保健婦に栄養士、そのほかの分野の隊員たち6名が一丸となっている。その協力活動はセンター職員への技術指導、助言に始まり、センターに収容された栄養失調児の看護、臨床検査、母親への栄養指導に至る。さらにセンター周辺地域を対象として、退院した子供たちの栄養失調の再発防止活動、栄養失調児の発生原因の調査、総合的な地域住民の衛生教育、環境衛生の改善等を推進している。

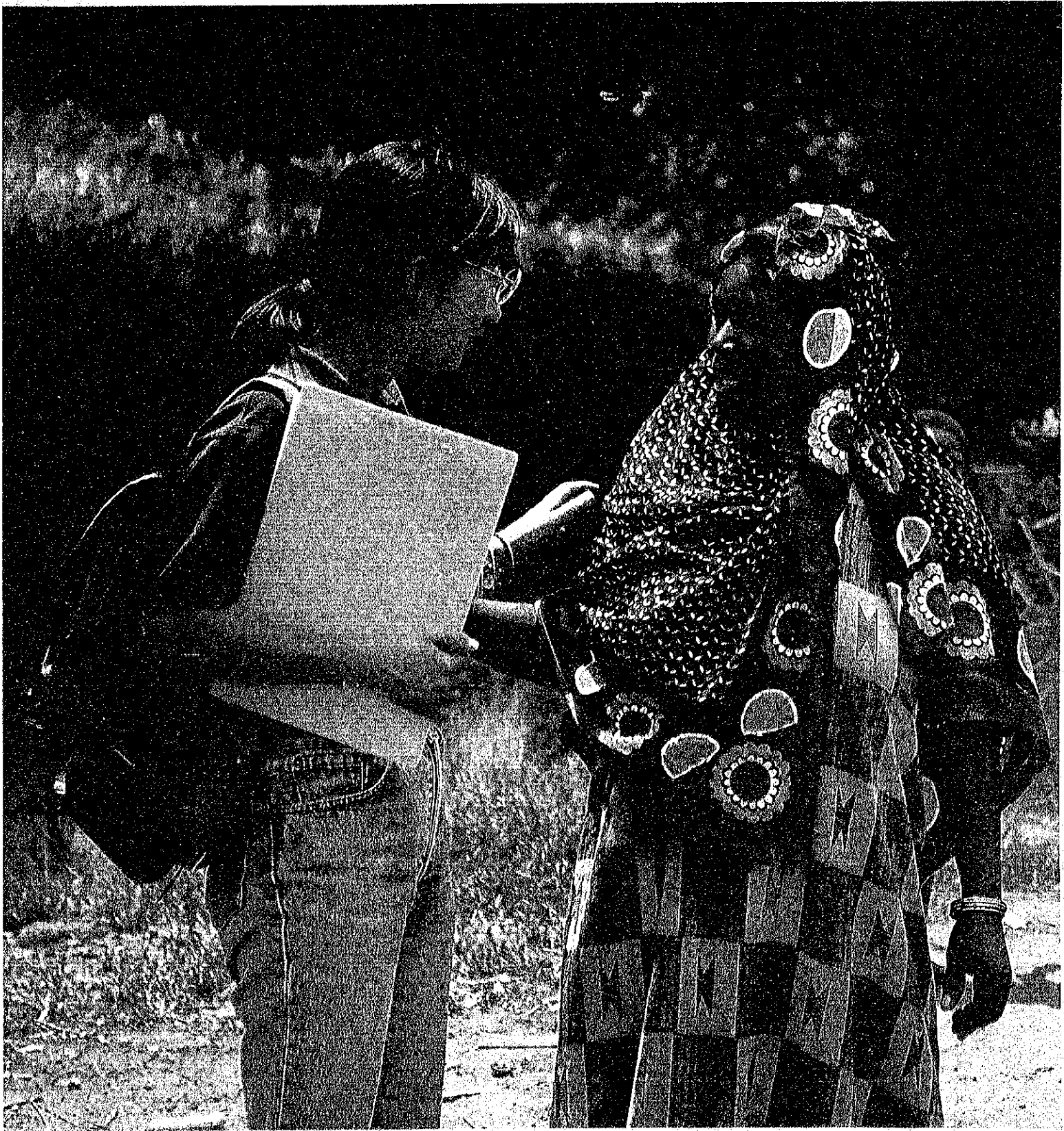
この地域での生活環境は厳しく、5歳以下の子供の死亡率は極めて高い。ひとりでも多くの子供が元気に成長して欲しい。それがプロジェクトチームの願いである。



センターの内外で母親たちに、インタビュー調査を続ける保健婦の養永直巳隊員。(次頁) 調査の合間の世間話もプロジェクト運営の潤滑油となる

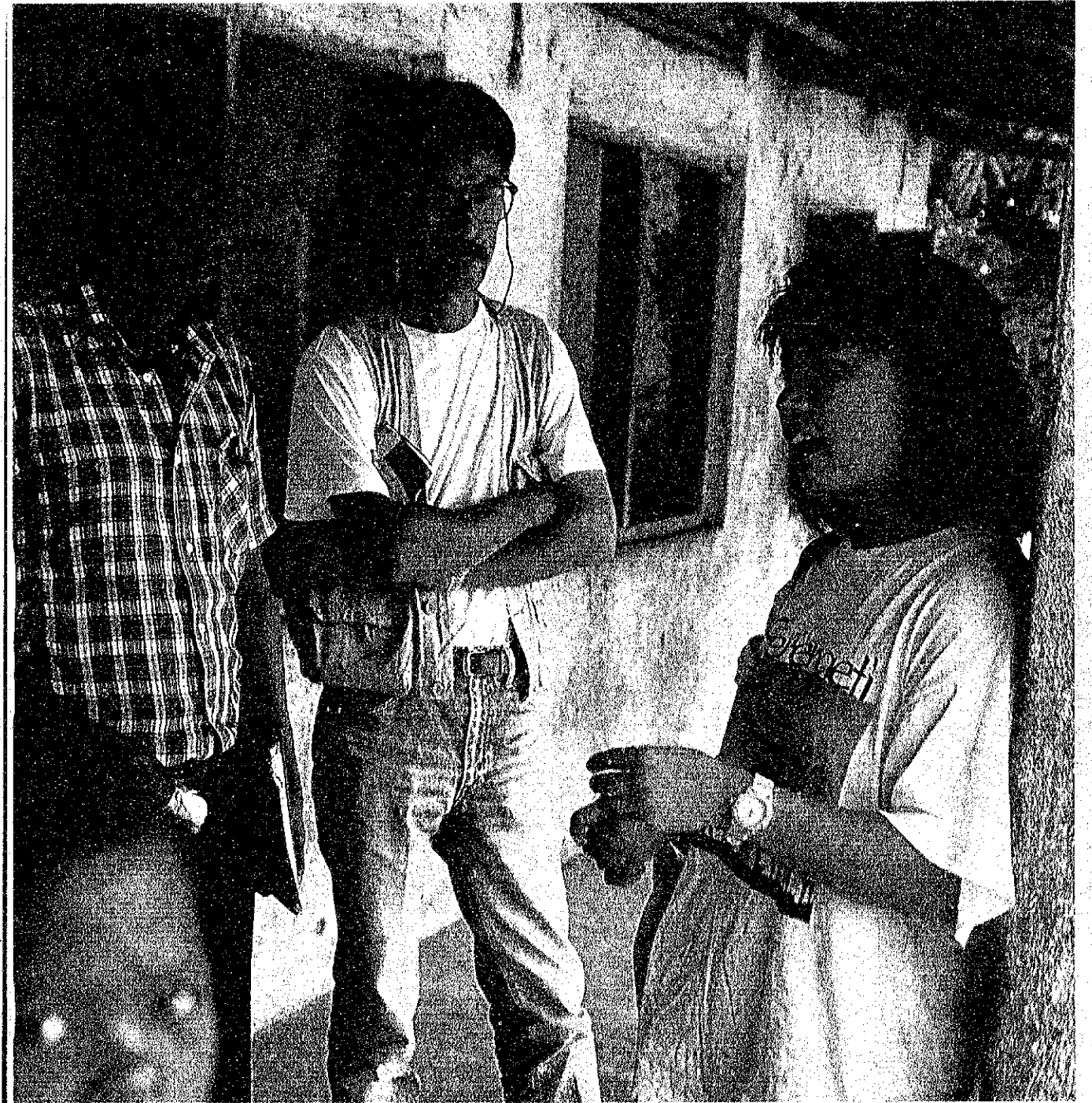
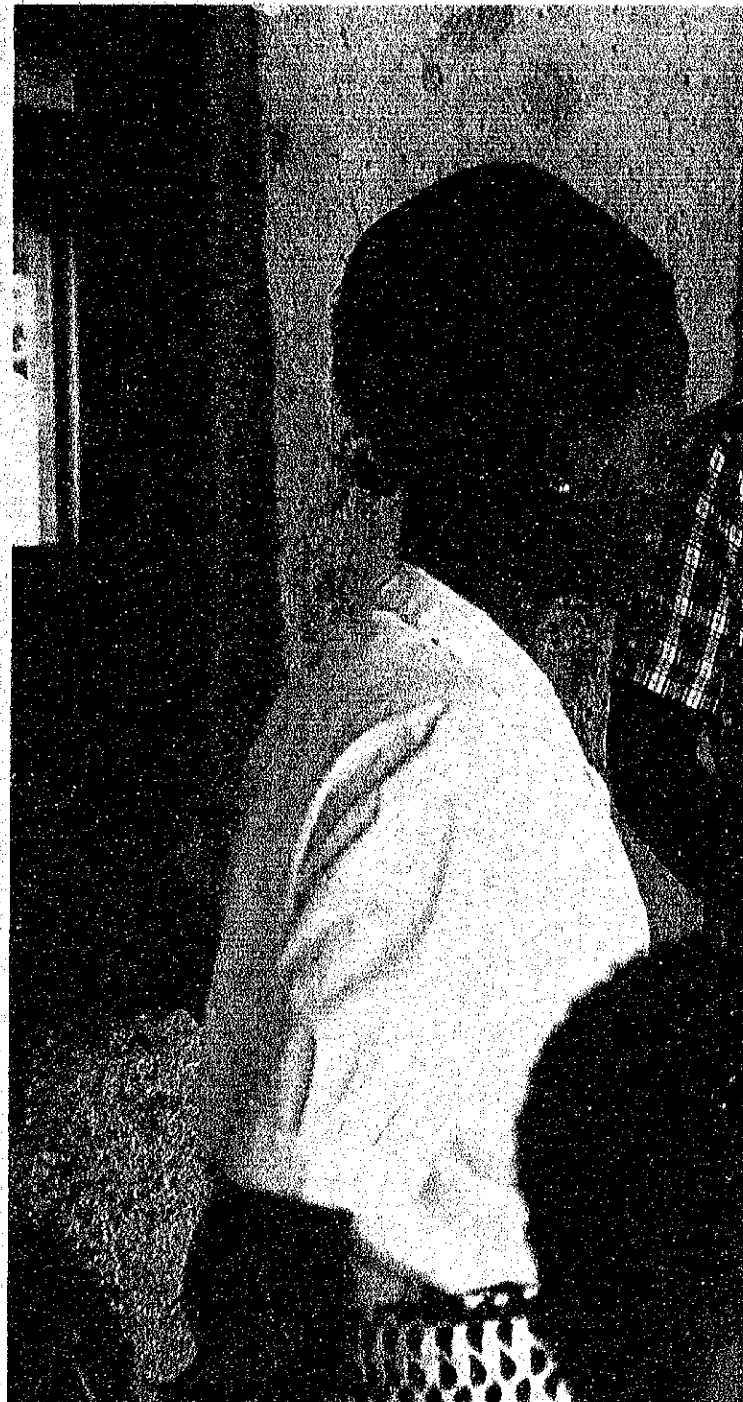
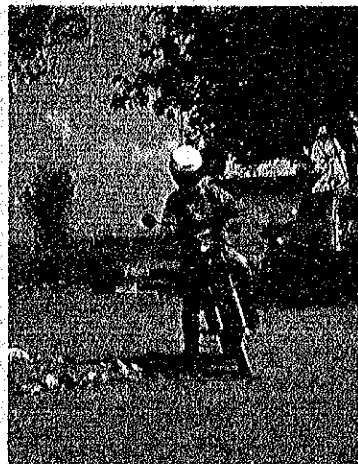
現地のスタッフと活動についての反省、今後の計画などのミーティングをおこなう。緊密なコミュニケーションがプロジェクト運営には欠かせない。右端、前川寛之シニア隊員はプロジェクトのリーダーとして活動している







(上) 子供たちがタイヤ遊びをする、のどかなイロンガの村の広場。(右) バイクで移動する隊員。ここでは隊員の大切な足となっている



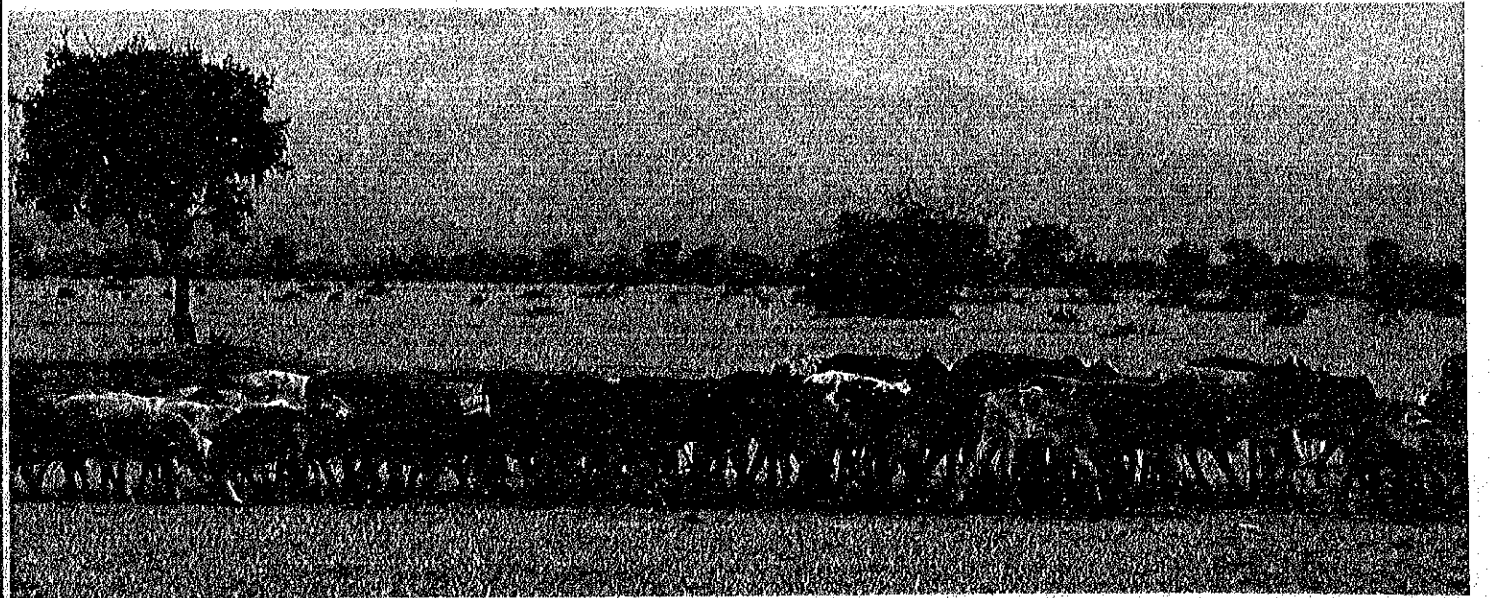
村々をまわりながら栄養改善の指導をし、村人たちの相談相手にもなる栄養士の鶴西真佐子隊員、野菜栽培の前川シニア隊員とタンザニアスタッフ。(前頁上)保健教育用のポスターやチラシを配布して、母親たちにわかりやすく説明する



栄養士や保健師の隊員が、医療的な面から指導することを具休化させるのが、野菜栽培の新出陣隊員である。彼は野菜の栽培方法を教え、実際の食生活に取り入れて栄養改善を図っている。(上) 村人に野菜栽培を指導中の隊員



(上) 活動の合間に防れたマサイの村人たち。(右) 保健師の高橋美枝子隊員。初めて会う人でもすぐ友達になってしまうのは彼女の特技。(下) マサイの村人たちが飼っている牛の一群



カーナ

ある時は整備工場の中で、ある時は大自然の中で 隊員たちが支え続けるものは計りしれない

細菌学者として高名な野口英世博士が活躍したカーナの地に、その70余年後の今日、同じ日本人として協力活動を展開している隊員たちの姿があった。

自動車が必要な交通手段となりつつあるこの国で、自動車車両の保守、管理はもちろん、基礎知識から部品、工具の扱いにいたるまで、まず人材を育成することが先決である。隊員は整備の熟練者養成に全力を傾けていた。

生命に直接関わる医療。その医療の中でも近年の情報化、医療管理体制のコンピュータ化が果たす役割は大きい。病気の多発するこの地において、乾季のサハラ砂漠から吹く季節風ハマターンの砂塵から、コンピュータを守らなければならない。システムエンジニア隊員の苦闘が続く。その努力の日々が、コンピュータネットワークシステムの完全構築・普及につながる。

牛乳のほとんどを輸入に依存しているカーナ。子供たちに国内産の牛乳を飲ませたい。その乳牛の育成、生産に貢献したい。そんな隊員の夢は大きく広がる。



五百川隊員の配属先の村人たち

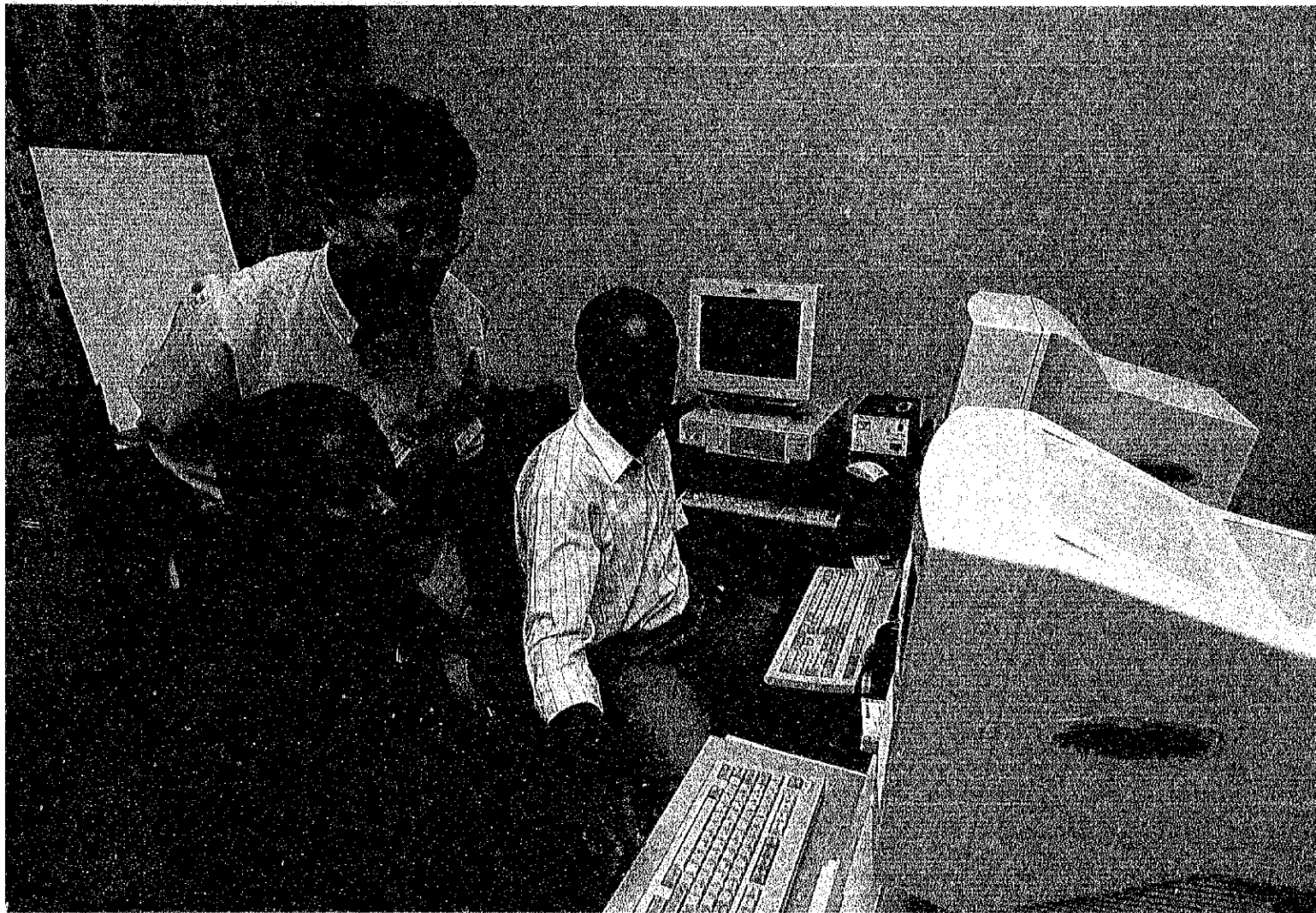


とにかく、今の彼らに必要なのは、自ら経験してみることだと思います

車両整備工場で、自動車整備隊員として協力活動をする五百川信彦隊員。ここではいつも部品や工具が揃っているわけではない。工具がなければ自分たちで作るか、その場にあるものをつまぐ利用するしかない。そんな臨機応変な対応ぶりが、彼らに感心され一目おかれ、「モモさん」という名で親しまれる。まず口で説明し実際にやってみせ、最後に本人にやらせよう。そうすることで彼らが技術を自分のものとしてすることができる



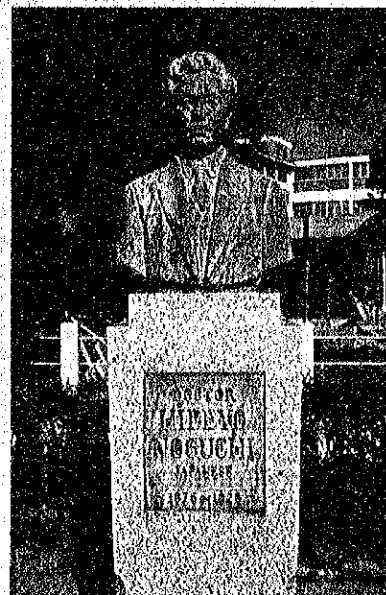


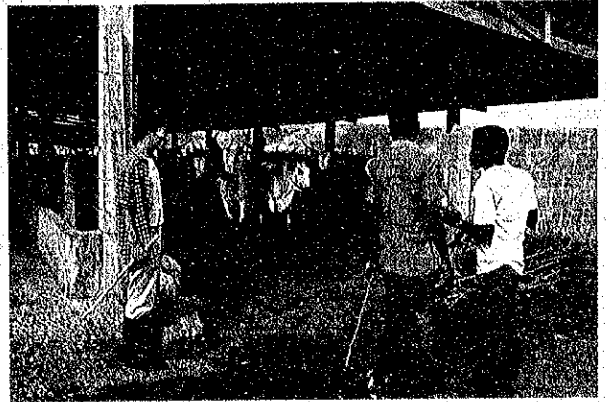
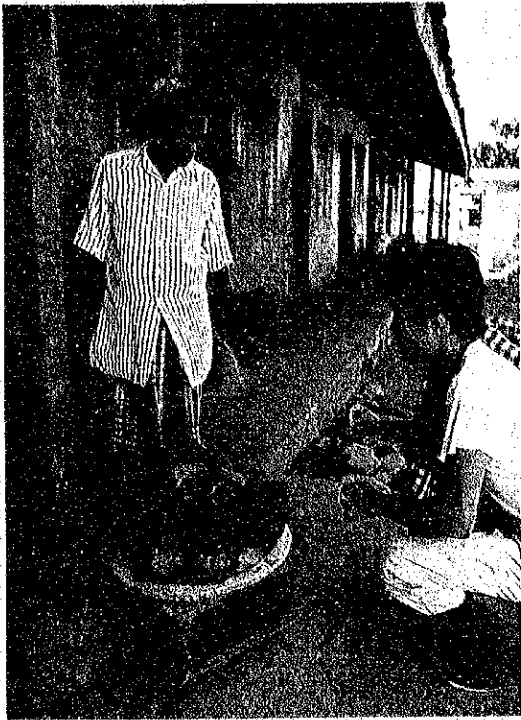


ハマターン(季節風)のほこりに蟻やカビ
コンピュータの大敵と戦いながらのシステム開発は
やりがいがあります

医療管理体制の抜本的見直しのため、システムエンジニアとして活動している村上雅尊隊員。日本と同じコンピュータでも、あまりに違う環境下ではその操作も大変だ。自ら開発したプログラムを説明し、彼ら自身で構築していけるよう指導する。既製のものではなく自ら作り上げ、それを伝授することはとても骨の折れる作業だが、大いにやりがいがある。

村上隊員が勤務するコレブ病院には、研究活動中に逝去された野口英世博士の記念像がある。同じ敷地内には、博士の顕微鏡や椅子などが展示された記念館と小さな日本庭園もある





仕事から休日でも、
牛たちに会いにくることもあります

牛乳を飲む習慣があまりない、この国の食生活改善にもつながる牛乳生産量の増加を目指し、乳牛の飼育に忙しい岐島堅信隊員。アムロヒア・デイリー・ファームは数少ない搾りたての牛乳が飲めるどころ。ほとんどを輸入に頼っている現在、周辺農家を手はじめに、ゆくゆくは国内に酪農を拡げ、乳の生産量を高めたいと岐島隊員の夢は大きくひろがっている。(左上) 昼食にケンゲを買う。仕事仲間が大好きなケンゲはとうもろこしの粉を固め発酵させたもので酸味が強い。(下) 早朝のミルクチェック。色などを丹念に調べる

